

本書は、上智大学英語教授法 TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) コースや所属する専任教員の研究内容の紹介したのですが、応用言語学という学問がどのような領域や分野を取り扱っているのかが分かるという意味で、英語教育関係者（指導者、大学院生、学部生等）にお勧めしたいと思います。本書は 2 部構成になっており、第 1 部（実践編）は TESOL コースの目的や構成、科目の紹介がなされ、後半（研究成果編）では当該コースに所属する専任教員の研究内容が紹介されています。

第 1 部では、まず、コースの開講科目一覧、入学方法、使用言語、クラス形態、2 年間の学びの流れ、シラバス例、修士論文の作成の流れ等について書かれています。当コースに入学するための準備（求められる英語力、出願資格、必要書類、試験内容）から、入学後の学習・研究のイメージまで記述されており、入学を希望している人は必読です。他の大学院の受験を考えている人であっても、大学院とはどのようなことをするところで、入学するにはどのようなことが求められているのか、入学後の心構えなどをイメージすることができ、非常に役立つ内容になっています。さらに、第 1 部には、TESOL コースの開講科目（Second Language Acquisition、Language Testing、Sociocultural Theory and SLA、Action Research 等）ごとに、それぞれどのような内容であるのか、お薦めの図書や論文について、それぞれ 2~3 ページで紹介されています。非常に多岐にわたる分野や領域をカバーする応用言語学を学ぶ醍醐味をダイジェストで味わうことができるでしょう。

第 2 部は、日本の応用言語学を牽引してきた当該コースの専任教員の研究例が紹介されています。吉田研作氏の章（「これからの日本の英語教育の方向性」）では、日本の英語教育の将来について、Can-do、「英語の授業は英語」で、内容統語型学習（CLIL）などのキーワードをもとに、展望しています。渡部良典氏とジェイソン・マケヴォイ氏の章（「TKT (Teaching Knowledge Test) に見る言語教員に必要なとされる資質と技能」）では、外国語教員の能力・知識・技能について、大学生や現職教員を対象に実証的に検証しています。和泉伸一氏の章（「英語学習のビリーフ、学習方略、そして獲得した能力の自信度についての研究」）では、日本の大学に在籍する英語学習者を対象に行った実験を 2 つ紹介しながら、ビリーフ、学習方略、能力の自信についての関係を論じています。Lisa Fairbrother 氏の章（「Preparing Japanese Learners of English for Study Abroad: What's missing?」）では、Eメールやインタビューを用いて、大学生や大学院生が海外留学中にどんな困難を抱えているかを明らかにしています。坂本光代氏の章（「Challenging Hegemonic Discourse: Oral Proficiency = English Proficiency?」）では、アンケートやインタビューを用いて、日本人大学生（帰国子女を含む）が持つ英語学習観とはどのようなものなのか、留学経験の有無がどのような影響を及ぼしているのか等を明らかにしています。最後の坂本光代氏と渡部良典氏の章（「日本の英語教育向上を目指して：現状と課題」）では、第 2 部で紹介されている研究内容を振り返りつつ、日本人の英語に対して誇り・価値を見出すことが重要だと説いています。

日本の英語教育は今転換期を迎えています。未来の英語教育をつくるため、理論に基づ

いた研究や実践を積み重ねていくことが今まさに求められています。本書を手にとって、その第一歩を踏み出してみませんか。